ホオジロガモ食道内の餌の一部
写真説明：右方一番上メダカ，次の4点はモッコ（幼）

左方3点はトウホクサンショウウオ6匹分中のもの

〔中央の円いものは食道に人がつめた綿のかたまり〕

トウホクサンショウウオ (*Hynobius lichenatus* Boulenger) 6 匹 (16-64 mm.) 外鰓ある幼生。

従来ホオジロガモの食性については Delacour (1959) は動物質が主で、植物質は25%にすぎないと発表している。アメリカホオジロガモ (*Bucephala clangula americana*) については Kortright (1943) が詳しく報じている。それによると：動物質 74%，植物質 26% となっている。

動物質の内には甲殻類(カニ類を含む, 16) 32；昆虫類(トビゲラ類を含む, 12) 28；貝類 10；魚類 3；雑 1 となり、植物質ではヒルムシロ類 (*Potamogeton*, Pondweed) 9；セキシウモ類 (*Vallisneria spiralis*, Wild celery) 3；カワホネ類 (*Nuphar Spatterdock*) 1；穀物 (bait) 1；ホタルキ類 (*Scirpus*, bulrush) 1；雑 11 とな

っている。そして 5~6 月の間はこの間のカモの食性は植物質が半以上を占めるが不思議にも 7 月は最少量 (10.5%) の植物質を摂っていることが知られた。砂礫は砂囊内容の凡そ 25% を占めている。

英国の例では Claud Ticehurst: History of the Birds of Suffolk によれば Charles Oldham が胃内容の固定により *Neritina fluviatilis* (ヒロクチカノコガイ 1 種), *Bithyria tentaculata* 及び *Paludestrina confusa* の 3 種の貝類を検出した。

以上の報告中に両棲類を食べている記録がないので、今回のトウホクサンショウウオを餌の内に見出したのは初めての報告かと思う。

因に今回のホオジロガモの外部測定を掲げて置く。全長 465, 翼 230, 尾 90.5, 跗蹠 40, 露出嘴峰 32.5 mm, 尾羽の数 16 枚, 体重 220 匁 (825 g)。

A male *Bucephala clangula* obtained in Akita, December 1959 had in its oesophagus: 1 *Oryzias latipes*, 4 *Pseudorasbora parva* (fish) and 6 larvae of *Hynobius lichenatus* (Salamander). The amphibia is first reported here as its food.

ハクセキレイの集団性と集団就眠に就いて Gregariousness and flock-roosting of the Pied Wagtail 湯 浅 純 孝 Sumitaka Yuasa

黒田長久先生が本種の集団性に関して、春の記録を第 75 号に発表されましたが、当地(富山県)に於ての二・三の筆者の観察例を報告いたします。

1957 年 11 月 1 日 曇後晴 昨日まで目につかなかったのに、今日急に高岡市内各所（例：仲町，中川，清水町鐘紡附近等）に現われた。

同年 11 月 8 日 曇後晴 鳥友の岡田巖君から庄川下流新湊附近に多数のハクセキレイが居るとの報告。

1958 年 9 月 4 日 庄川に 3 羽初渡来。

同年 10 月 5 日 晴 富山県新湊市庄川大橋（中伏木～庄東間）附近の水田で午後 4 時半～5 時半頃、約 100 羽と 20 羽の群が落着かぬように水田や河辺におり、暫くの後低く飛上がり又おりと云った行動を繰返し、非常に落着かぬふうであった。別に餌を採っているようでもなかった。その後薄暗くなりだした時、同庄川大橋のすぐ南側の電車の鉄橋（高岡～富山間）のコンクリートの橋柵、鉄材等に止まり始め、上を電車が通る毎に飛出すが、後には飛出す数も少なくなり遂には飛出さなくなった。又大橋（橋裏の鉄管）にも少数就眠するらしい。

同年 12 月 20 日、26 日 同地方に探鳥に出た際も 20～30 羽の数群が同橋に向って一定方向に飛去るのを観察した。庄川新湊鉄橋及び大橋には、この頃多い時で 200 羽以上は就眠する。

1959 年 1 月 14 日 曇後雪 同橋附近の積雪 30 ㎝でここ 1 週間 30～65 ㎝の積雪があり、水田も地面の露出もなく、ハクセキレイの個体大変少ない。

同年 10 月 13 日 高岡市渚地内の広い整備中のグラウンドに 20 数羽の群がおりて採餌中を観察した。これ等の個体もまだ渡来後の群をとかず群生活をしているのだと思われる。このグラウンドに於ては 20 羽前後の群は前後十数日間見る事が出来た。

以上渡来群及び集団就眠例を記しましたが渡来は多数の群がかたまって来ると思われ、人の目のふれてから、急激に分散して拡散すると想像される。又集団就眠については渡りの前のみならず、当地に於ては冬期の短期間の多量の積雪期を除いて見られる。春もいる（ノートの記録はないが）。この事は岡田君も登校、下校の際に電車の車中から見ておられる。そして又、この橋は連年本種の集団囀場として利用されている。

In Toyama, the Pied Wagtail has been observed (1957-1959) in flocks when arriving and up to 200 birds roosted every year on iron and concrete bridges of River Sho near Shinminato through the winter, except when heavy snow.

〔尚ハクセキレイの鉄橋集団就眠は大阪医大の田部浩教授が岡山でも見られた（書信）。また Schmidt (Vogelwarte 20(2): 161, 1959) は灌木での集団就眠の写真を掲げ且既知の記録を列挙しているので参考とせられたい〕。(黒 久)